



森のなかま

2009年4月号

NO. 12 (継続157)

NPO法人かながわ森林インストラクターの会 <http://www.forest-kanagawa.jp>

発行人 島岡 功

みどりの県民運動の新たな出発にあたって

財団法人 かながわトラストみどり財団

理事長 新堀 豊彦

かながわ森林インストラクターの会の皆様こんにちは。

既にご承知のことと存じますが、当財団では、本年4月から、これまで(社)かながわ森林づくり公社が実施してきた「森林づくりに係わる県民運動事業」を受け入れることになりました。

当財団は、昭和60年に神奈川県のご認可を受けて設立された公益法人で、神奈川県と連携して、今日まで、まちのみどりの保全・創造を中心に活動をしてきております。これまでに県のトラストみどり基金による6ヶ所の緑地の買入れ、財団による6ヶ所の緑地での地権者と保存契約締結など、みどりの保全に一定の成果をあげております。

一方(社)森林づくり公社では、神奈川県と連携して、県内各地でかながわの森林についての普及啓発活動を行うとともに、丹沢、箱根などの森林で県民の皆様の参加を得て植林、下草刈り、枝打ちなどの森林づくり活動に取り組んでおり、ボランティア活動には毎年約5,000人を超える県民の皆さんが参加しております。

私は、みどりを守り育てることの重要性が増している今日、これらの事業を一元的に展開することは時宜を得たものと考えております。また、それらの事業を受入れるに当たって、当財団では、事業予算の確保はもとより、公社が培ってきたノウ・ハウを活かせる体制の整備に留意を払ってきたつもりでございます。

環境問題の解決には、地域に根ざした具体の取組が重要でございます。当財団では、今回の公社からの事業の受入れを契機として、まちのみどりから山のみどりに至る広範なみどりを対象にかながわのみどりを守り・育てる県民運動の推進に努めて参ります。この運動を、より多くの県民、企業の皆さんが参加するものに発展させるためには、森林に係る普及啓発や県内各地での森林づくりの活動はもとより、トラスト緑地の保全、環境学習などの活動を着実に積み重ねていくことが重要であります。かながわ森林インストラクターの会の皆様には、運動の発展のために末永いご支援をよろしくお願いいたします。

新説・かながわのブナ林（帯）文化

—修験道—

飯村 武

「形あるものは必ず滅す」。仏者が深くかかわり、仏語の山名地名の多い丹沢、その主稜で目の当たりにしたのはブナ林の壊滅的な枯死。白骨体を思わせる、悲しく無残な姿であった。この悲しさは否応なく「必ず滅す」へと誘い、その教義はいつしか化学変化を起こす、無表情な物質へとおきかえられてゆく。丹沢主稜部に成立するブナ林の枯死、それは眼下に広がる首都圏の巨大な経済活動が主因、とするのが専らである。丹沢の主稜に立ったとき、Nox、Sox、酸性雨（霧）などのキーワードが胸を刺す。そして今また、白骨ブナ林はCo2排出・地球温暖化の化身となってわが身に迫ってくるようでもある。

「丹沢」の語は朝鮮の古語に由来し、高麗人にとっては古くからの憧憬の的であった。

この的は、わが国の仏者ことに修験道（山伏）の入峰によって曙を迎えることとなる。

相模国（かながわ）の最高峰、それは丹沢の「蛭が岳」である。この山名は毘廬舎奈仏が祀ってあることに由来する。毘廬舎奈仏は即ち大日如来で、修験者たちの本尊である。

修験道は奈良、平安、鎌倉時代にかけて流行した。特に丹沢は鎌倉武家政権の目前にあるため、関東における修験の霊域、一大道場となった。常緑広葉樹の岳麓に拠った修験たちは、兜中、篠懸、結袈裟、笈、金剛丈の装束で丹沢の主稜を目指した。そこでまず目にしたのは、岳麓と相を異にする落葉広葉樹林、わけても彼らの心を捉えたのはブナの樹幹の灰褐色濃淡模様、その林の移であった。春・残雪から新緑へ、夏・生まれ出ずる喜びの森、秋・黄葉から灰白漂う林間、冬・雪—雪—雪—雪、そして再び春。ここでは四季折々に鳥獣虫魚が綾なして生命を喜び合っている。クマタカ、シカ、ツキノワグマ、オオカミ、ミヤマクワガタ、ヤマメなどなど。

前述の高麗人の憧憬とは、こうした「空には鳥、森には獣虫、水には魚」に集約されるブナ林への宗教的な心であったと思われる。

修験者たちも当然、このような心を求め、更には涅槃の彼岸に至ろうと主稜の跋涉を目指したにちがいない。脳裡に描えた世界がそこにあった。ブナ林に形成された食物連鎖の一つ、捕食連鎖構造を下部に踏まえて、今日もまたクマタカ、いやイヌワシが悠然と飛翔していた。正に「行雲流水」（行く雲、流れる水）の観である。しかしそこには体の大きいものが頂点に位置する「生体量のピラミッド」が厳然と映し出されていた。

本尊のおわす蛭が岳山頂は「日々是好日」（良い日も悪い日も貴い）。草や木も動物も菌類も、適度な木漏れ日に分相応の営みを続けていた。そんな中で殊更小さなハチ。大きな芋虫に、あるいは蝶や蛾が生んだ卵に針を刺して卵を生みつけ、自分の子を育てている。自分の体よりはるかに大きい動物を倒す寄生蜂だ。もう一つの食物連鎖、寄生連鎖である。体は小さいが、数の多い、つまり員数のピラミッドの厳しい掟がそこにあった。

落葉、落枝の積ったブナ林の林床はスポンジのようだ。トビムシ、ミミズ、ササラダニ、バクテリア類が暗躍し、腐生連鎖の戒律のもとに地上部を支えている。「衆善奉行」（衆のために良いことをしよう）の世界を見る思いだ。

衣替えの終わった山々、ことに堂平の初冬のブナ林は静寂そのものである。修験者たちが林床に坐し瞑想していたとき、顔前を2つの獣が駆け抜けて行った。逃げるシカ、追うオオカミ、それは正しく栄養段階の頂点が演ずる森のドラマだ。食物連鎖の最果て、食物網、そして食物環。無表情に物質が移動し、エネルギーが流転する。修験者たちは立ち上がり、祈祷した。「形あるものは必ず滅す」と。だが、Sox、Nox などとは無関係の「諸行無常」であった。

私の認識

我が国で観察できるけれども、その遭遇機会が非常に少ない野鳥に“迷鳥”^{メイチョウ}と呼ばれる即ち、迷い鳥が居ります。数種類居ります。

参考書の用語解説に依りますと迷鳥とは、正常な棲息地域でない地域に迷行して来た鳥（種）の事を言うそうです。

因みに、遭遇機会の少ない野鳥に、“旅鳥”^{タビドリ}と呼ばれる種もあり迷鳥と紛らわしい・・・と言われるビギナーも居りますので用語解説でその違いをハッキリさせて貰います。旅鳥とは、一般に日本より北の繁殖地と日本より南の越冬地を往復する鳥（種）、勿論繁殖地が日本より南のケースも含まれますが、“渡りの途中で日本に立ち寄る野鳥”が旅鳥なのです。

従って私は遭遇機会が同程度に少なくても、旅鳥と迷鳥ではその希少性、サプライズの度合いから見れば、迷鳥に遭遇する方がはるかにラッキーであると認識しております。その迷鳥の中で未だ観た事が無いのですが会ってみたいと思っているのがレンカク（漢和名：蓮角、英名：Pheasant-tailed Jacana 体長 L=48cm（繁殖羽）、31cm（非繁殖羽）、♂♀同色）。

チドリ目レンカク科の此の野鳥は、世界地図上で見るとインドネシアからインドやスリランカに行けば湖沼や湿地の水辺で常に見えることが可能だと言われてますが、迷行して日本に来るとバーダー仲間話題になります。その最大の理由は、夏羽^{ワケ}—繁殖羽^{ナツバネ}—で迷行して夏に会える固体と、冬に冬羽^{フユバネ}—非繁殖羽—で迷行して来た個体とでは、これが同じ種の鳥なのか？と思うぐらいに体色も外観も変っているからだとは私は認識しております。

即ち、夏羽の場合は頭頂、顔、喉下が白色で、後頸部に黒線で縁取られた金色の部分が非常に目立ち、背面と下面は黒色、雨覆が白色、三列風切が茶褐色、そして黒く長い尾羽が深い印象を与えます。逆に冬羽の場合は頭頂から後頸、背面、雨覆の側面全てが茶褐色になり、尾羽は黒色ですが短くなり、喉下や

野鳥 その65

高橋 恒通

下尾筒に白色の部分があるけど超地味です。



この体色と外見上の大落差に私は強い興味と関心をいただき続けております。

更にレンカクの最大の特徴は、丈夫で長大な両脚と同じく長大な趾足^{シンソク}=足の指=、そしてやはり長くまっすぐ伸びた爪です。この特徴は夏冬共通であります。

そして迷行して来たレンカクは、長大な趾足を存分に活用してオニバスやスイレン等の水草の上を巧みに歩き廻り、水草の実や茎や根、そして昆虫類や甲殻類などを採食するそうです。此の行動は正規な棲息地でも変わらないとのこと。

参考書に依りますとレンカクは「エッ！ホント？」と言いたくなる行動をします。それは、繁殖期に巣づくり、抱卵、子育ての全てを♂が行うと言う事です。♀の方は交尾し卵を産んだら直ちにその♂の元を離れて別の♂と交尾、産卵・・・と言う行動をとります。

我が国でレンカクと同じ行動をする水辺の野鳥は留鳥のタマシギ（チドリ目タマシギ科）です。タマシギに関しては改めてご案内致しますが、♂が抱卵、子育てをするからです。

レンカクやタマシギと全く逆な行動をするのがウグイス（野鳥その26で紹介済み）でしてモテる♂は巣づくりも何もせずに寄って来る♀と次々に交尾をするだけであります。

何はともあれ私は夏羽の時のレンカクにだけは神奈川県下で逢ってみたいと思っております。

<参考資料>

- ・日本の野鳥、山溪カラー名鑑、編：高野伸二、森岡照明、叶内拓哉、蒲谷鶴彦、山と溪谷社
- ・日本の野鳥、山溪ハンディ図鑑7、写真・解説/叶内拓哉、分布図・解説協力/安部直哉、解説（鳴声）/上田秀雄、山と溪谷社
- ・写真 C-5060&E-100RS と野鳥の部屋より

本の紹介

堤 洋 8期

日本の杉でつくる小さなお家

後藤雅浩 著



スギの端材を利用して、趣味の家(自分の城)を自力で建てようという指導書です。敷地と時間のある方には楽しいと思います。基本は間柱材という幅105mm×厚さ27mmの下地材でパネルを作り、組み合わせることで建築します。市街地では行政への届出が必要な場合もあるが、概ねはその必要の無い家を作ります。大きさは2間弱×1.5間、六畳の家になり

ます。

窓、勝手口もあります。間柱材の多くは間伐材から製材されているそうです。

道具は、インパクトドライバー、丸ノコ、水平儀、サンガネ等の日曜大工道具でクギではなくコースレッドビスというネジで締め付けるため、さほどの技術は必要としていない。材料はキット製品でも3~50万円の範疇とのこと。工期は人手と慣れにもよるが精々3週間程度だそうです。但し、日曜大工ではどうかな。

作り方は工程毎に写真で紹介されており、本にはDVDも付属してあるので素人はともかく設置できる土地と時間があれば辿り付けるかと思えます。床や壁、屋根は遮水膜や防音断熱材が入っており、快適に過ごせるという事です。著者によると気兼ねなく趣味のひと時を過ごすには最適との事。

間柱材という端材で反りや割れの入り易いものを使う為、ビス打ち時にそれに対応して材を木裏と木表を重ねたり、ビスの長さで調整を取っている。屋根は鋼板横葺きで下地に防水シートや防音断熱材を入れることで静穏・断熱効果を求め、窓は市販品のアルミ枠を入れている。床も根太から組み上げ断熱材を入れた上でフローリングの床材をセットしている。壁も同様に断熱材入りのパレットを組み立てた上ではめ込んで行くため、技術と体力より時間とスタミナのように。子供の頃、このような小屋が台風時に吹き飛んでいるのを見た覚えがありますが、これには基礎を固める折に、アンカーを地中に打ち込む事で解決しますし、地震時の倒壊についてはパネルの強度試験がされているので安心でしょう。

(農文協 1,850+税)

森林と人間—ある都市近郊林の物語

石城 謙吉著



苫小牧市で実現した「都市林」づくりの体験記である。我々の眼にする人工林の現状と変わらない北海道大学苫小牧演習林を地域の人たちの親しめる郊外林としてだけでなく本来

の目的である大学の研究にも活用できるものに時間をかけて育てた記録であり、前著「森はよみがえる」(講談社現代新書)が技術的な体験談になっているのに対し、その経験を踏まえた市民との交流や海外の都市林の視察体験による「都市林のあり方」について述べられている。林野で言うところの施業的なものは前著に詳しいのでそちらを参考にしてください。著者は農学部出身であっても専攻は動物生態学が専門の研究者である。林学ではないのでこのように大学の演習林を市民に開放するとともに多角的な研究にも取り組める森林への転換が出来たのかも知れない。とはいえ、日頃間伐不足の林や手入れのされていない線香林を目にする事の多い我々にも同様な環境の中から市民の憩いの場ともなり、且つ、研究の場ともなる森林の施業方法や考え方には一つの指針を与えるものになると思う。同時に、都市林だから林業目的の施業をやれないというのではなく、市民へ開放された森林でも施業方法の工夫によって木材の供給の役割は果たす生産林の役割が果たせるという方途をヨーロッパの視察結果等を交えながら実例として示している。更に言えば、自然保護活動の人たちとの交流では本音の話し合いによる解決策の見出しや、高速道路計画に対しての道路線形の見直し提言等何処にでも在りえる諸問題についての真摯な取り組みには頭が下がる。

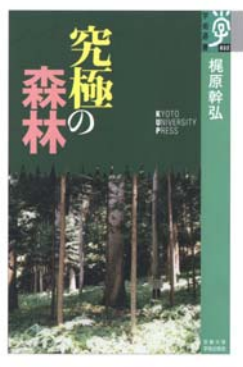
この本にも記載しているが大学の演習林だから出来たという議論に対しては、林学を学んだ者(筆者)として、この当時はまだ拡大造林の余波で、「林業即針葉樹の人工林」との教育を受けた者にとっては、このような発想を持てたかどうか、疑問のあるところである。

この筆者の研究林は北海道苫小牧市にあり概ね平坦な土地に立地する森林である。気候的にも欧州流の都市林が構成できたと考えられ、そのまま我々が適用する事は難しいであろうが考え方の踏襲は十分出来ると思う。

(岩波新書 700+税)

究極の森林

梶原 幹弘 著



森林国日本のこれからの森林施業のあり方についての提言をまとめた本です。著者は半世紀に渡って林学（森林学）の研究を続けられている学者である。

ここで言う「究極の森林」とは、かつての日本国内でも実績はあるものの、戦後の拡大造林の大合唱の中で省みられる事のなくなり、

一部の断片しか残っていない著者のいう「ヨーロッパ流の**択伐林**」、日本流には「**ナスビ切**」を示している。

本の前半では、日本の森林施業の歴史を紐解き解説して後段の択伐林への誘導に配慮している。中段は著者の半世紀に及ぶ森林の成長に関する研究成果を判りやすく解説すると共に植物生態学的見地や環境保全に関する防災学的見地等からこの択伐林と皆伐人工林、天然林等を比較してそれらの特徴をまとめここでは最終的に択伐林への志向を願っている。スギやヒノキは陽樹であり日本の気候帯から遷移が進めば、特殊な環境下ではともかく成立の難しい種であるが、人間との係りの中では有用樹として生活に欠かせない。植物学的にその成長を促進しつつ、防災学的にも有効な森林の育て方としての提案である。

確かに、著者の言う択伐林は、林地内で樹齡(又は樹種)の異なる**樹木(の樹冠)**が樹林を覆い尽くす事で、土壤保全に効果があり、林地の植物成長量は最大になり、森林内に生息する動物類の環境改善にも、地球環境保全に資するCO2の固定にも十分に貢献できる事になる。

著者もまとめの中で、経済的合理性を追求していくと、徒でさえ不足している林業従事者でこのような森林づくりが可能なのかと危ぶまれている。私は、日本の山岳地でのこの森林施業が経営的に成立しえるのか、学術的な議論では十分納得でき、技術的にも日本古来に実例があった故可能であろうが、現代日本でもこれを受入るには、高密路網の作業道と機械化の促進、それにも増して**必要なのが意欲と労働力**と考えている。

(京都大学出版会学術選書 032 1,800+税)

マイウェイ

村井正孝 9期

発行・財団法人はまぎん産業文化振興財団



「マイウェイ」は原則として年4回(3月、6月、9月、12月)発行し小冊子ながら神奈川の産業と文化の情報発信の一端を担い広く地域の方々に愛読されてます。「マイウェイ」は県下の行政機関、横浜銀行本支店等を通じて無償配布を行ってます。財団設立に伴い平成1年度に「カルチャートーク」さらに「カルチャーウォーク」を創刊、その後平成7年度に至り、横浜銀行が平成元年に発刊した「マイウェイ」を受け継ぐとともに、前記の冊子を統合して「マイウェイ」を財団の機関紙として発刊を開始、現在に至ってます。私達に興味深い「箱根の山川草木」「丹沢」「丹沢の自然景観」「かながわに生きる動植物」「かながわ石のいろいろ」「丹沢の森の物語」「かながわ地酒物語」「かながわ里山物語」「お国ことば物語」ではおなじみの秦野や小田原の方言が面白い。最近では「横浜ふるさと歌物語」が朝日新聞に紹介され人気を博した。この3月で70号「かながわ産業遺産物語」を発刊。東海道線今昔写真がたくさん掲載されてます。酒匂川の東海道の木橋を渡る明治33年(開業時)の写真に、国府津～箱根湯本間は約1時間でしたの説明がついてます。横浜銀行本支店のロビーに置いてあります。



活動短信

1/26～3/11

総合的な学習の時間「イツ岡上ワールド」

日 1月26日～27日 9時～12時

場 川崎市立岡上小学校の裏山
(丸山、アズマネザサが多い雑木林)参 岡上小学校、教員1名・6年生11名
イ 渡邊③

川崎市立岡上小学校は、全国学校ビオトープコンクール2007で銅賞受賞。その他に丸山の植物についてガイドブックにまとめ、シイタケ栽培や竪穴式住居を再現しているなど歴史や自然環境を大切にしている、いろいろな取り組みをしている。

1. 学習のねらい

自然との共生を大切にするをテーマに丸山を見つめ直すことや、丸山との関わりを通して、協力しあうことのよさ、恵まれた地域環境で学んでいることを感じとり考えを深める。

自然との共生を大切にするをテーマに丸山を見つめ直すことや、丸山との関わりを通して、協力しあうことのよさ、恵まれた地域環境で学んでいることを感じとり考えを深める。

2. 活動の内容

丸山の自然を増やそうというグループ活動、丸山にあると思われる実生の苗(稚樹)コナラ、シラカシなどを見つけ移植することや、いろいろな野生植物が育ちやすい環境にするためにできること。

1日目

森づくり(水源林)の現況や人工林と自然林との違い、雑木林と人間、他の生物との関り(過去、現在)などの話、後、自然観察、特に実生の苗(稚樹)を見つけることと、その稚樹をどの場所に移植するかが中心になりました。(学校の要望)

しかし季節的に実生の苗(稚樹)を見つける大変でした。(少ない小さい)又、霜柱で移植できる状態ではありませんでした。(学校も承知)

*その後は落ち葉を拾って雑木林とその特徴などの学習をしました。

2日目

草本、木本、有節植物などの話、後、体験学習として、樹木林内にある孟宗竹の伐採をしました。

その後は1日目の*印と同じ内容と移植場所をみんなで再確認と同時に植え付け方の指導をしました(卒業までには実生の苗(稚樹)の移植をしたいとのことでした) 又、児童達は樹木の所で他の樹木との違いや特徴について説明をする人、ビデオ撮影をする人に分かれて楽しそうに活動しておりました。

1日目、2日目共にいろいろな場面を写真やビデオ撮影をしておりました。後日、各グループが活動した内容について発表する会があるとのことでした。

(記 3期 渡辺)

県民参加の森林づくり活動(広葉樹林整備)

日 2月14日(土) 晴れ

場 大井町山田地内(おおいゆめの里計画地)
73名参 I女川⑨、友谷①、石原③、鈴木(友)③、
柏倉④、愛木⑦、久保寺⑦、松田⑦、武者⑦、
谷津⑦、加藤⑧、黒澤⑧、清水⑧、飯澤⑨、
海野⑩、中田⑩、研 石田(順)⑨、鈴木⑨、
牧野⑩、後藤⑩、

公 河野、鳥海、看 田嶋 準備請負 石鍋

作業場所はクヌギ、コナラなどの落葉広葉樹林とスギ、ヒノキの人工林で、林内にはアオキやタケ・ササ類など～3mほどの低木が密生し、見通しのきかない状態になっていた。まず低木を除伐し、余裕があれば高木の間伐などにも着手する方針で、5班に分かれて作業を開始。順調に進んで小1時間で予定面積の半分ほどがきれいに整備された。今日の参加者はやる気満々だ。これでは予定時刻より相当早く終わってしまいそうなので、範囲を隣接地に広げ、高木の処理も解禁した。参加者の熱心さと好天で全員汗だくだ。インストラクターの適切な指導の下、時々休憩し水分を補給しながら進め、11時45分には終了した。広々と見違えるように視界が開けた林内を眺めて、皆さん大いに達成感を満たしたようだ。どうもお疲れ様でした!(記 9期 女川)

「里山ボランティア育成講座第四回」

日 2月28日(土)

場 柿生緑地

参 一般市民 26名

スタッフ 川崎市公園緑化協会ほか 10名

イ 宮本④、井口⑧、久保⑧、清水⑧、野田⑧
松崎⑤、

川崎市公園緑地協会が実施する「里山ボランティア育成講座」シリーズの第四回目。前回に引き続き、今回も竹林管理作業体験と自然観察。前回は雨で作業が出来なかったが、今回は体験作業も十分出来た。いつものように初めにオリエンテーションがあり、その中で松崎が竹(笹)について簡単な説明をした。そのあと5名のインストラクターの指導のもと、午前中2時間たっぷりマダケ、アズマネザサの伐採を行った。午後は前回同様、佐々木事務所の佐々木さんが「早春の里山を楽しむ」というテーマで観察会を行った。3時終了、関係者で次回の打ち合わせをして解散した。(記 5期 松崎)

宮崎小学校5年生「やどりき水源林総合学習」

日 3月3日(火) 曇り後、雪 10時～13時半

場 やどりき水源林

参 川崎市立宮崎小学校5年生4クラス136名
教師8名

公 河野、小林

イ L宮本④、渡辺③、高橋③、増子③、島岡③、
武者⑦、渡部⑦、加藤⑧、黒澤⑧、野田⑧、
三浦⑧、中島⑨、村井⑨、酒井⑩、時田⑩、
福原⑩、

曇り空の寒い中、宮崎小学校5年生136名元気に到着。準備体操後、各班毎にインストラクターから注意事項等を聞きそれぞれのコースへ。

前もってまとめてきた質問をしてメモを取る子供たち、インストラクターの説明にメモをとる子供たち。ヌルデの実を舂めてみたり、スギやヒノキの葉を触ったり、アブラチャンやクロモジを嗅いだりしました。途中から雪が降り出し、今まで見えなかったクモの巣に雪がうっすらと積もり花のようになり、こんなにたくさんのクモの巣があったのかとビックリ。

お昼に雪が本降りになり休憩棟と集会棟を利用して食事。食後、雪が降っている中、多くの子はやどりき沢で水生生物の採集・観察をしました。最後に雪降る中、全員「手のひらを太陽に」を合唱して子供たちとお別れ。事故もなくヒヤリハットもなく今年も無事終了。今回は雪降る中での森林の学習、自然観察、子供たちにとって貴重な体験になったのではないのでしょうか。(記 10期 福原)

山北町主催 紙漉き指導者養成講座

紙漉き実践講座(和紙が出来るまで)

日 2月26日(木)10時~16時45分

参 三保地域の方 約25名

講師 井出①

イ 米本②、落合③、白旗⑦、松村俊⑧、内野⑨
中元⑩、(紙漉き手伝い、記録、クラフト、指導)

丹沢湖周辺の水源地域山北町旧三保村は、かつてミツマタの栽培が行われており、和紙の原料として出荷されていた。これを地域文化として後継者を育成するとともに、ミツマタから和紙づくりの体験観光ができるような町おこしを進めている。紙漉きは昨年に引き続き2回目の指導であった。原料のミツマタの皮剥ぎから和紙(ハガキと便箋)ができるまでの実践指導と、プロジェクターによる「手漉き和紙」のテレビ録画の上映を行った。

これによりプロの紙漉きの方法と同じであることが理解できたようだ。参加者は積極的で、ミツマタの皮剥ぎ→黒皮削り→煮熟→たたき→ミキサーかけ、と手際よく工程を進めて行き、紙料のできあがりである。やっと紙漉きの段取りとなり、ハガキは溜め漉き、便箋は流し漉きという工法で紙を漉く。紙料づくりに比べてアツという間に漉きあげた紙床それぞれに押し花をあしらひ、乾燥させ素敵な和紙を完成させた。

また、合間を利用してクラフトの紹介と簡単なクラフトや竹細工の指導も行った。

森林文化部会では、紙漉きに限らずさまざまな体験学習のプログラムを用意して、皆さんからの要望に応えられるよう努めている。



(記 9期 内野)

やどりき水源林での間伐作業

日 3月11日(水)10時~12時 曇り

場 やどりき水源林

参 三菱重工業株式会社(水源林パートナー)
64名

県 森林課/金田、小司

イ L佐藤武⑤、大塚①、相馬⑤、斉藤武⑥、
山崎⑦、松山⑩、

今年2月に水源林パートナーとなった三菱重工業(株)さんの最初の活動で、若い訓練生49名と指導員・スタッフの方々が寄水源林を訪れた。県/金田さんから水源林の紹介をしていただいた後、リーダーからインストラクターの紹介、間伐の話し・安全上の注意などをして現場へ向かう。

現場はBコース東電奥の尾根筋、かなりの急斜面でもある。各班ほぼ8名の殆どが初めての間伐作業ということで安全に配慮し班員全員で1本ずつ処理していくような体制で作業にあたった。作業時間も短いので各班3~4本程度の本数であったが、交代で鋸を挽き、大勢で力を合わせてロープを引く作業、地響きと同時に拍手が起こっていた。

帰りがけに、今日、汗して倒した間伐作業は水源林の手入れであるが、社会貢献をしたことの認識を促したが、皆さん満足感を味わっているように感じられた。(記 5期 佐藤)

**やどりき水源林
ミニガイド**

3月のトピックス

・ミツマタの花が満開になりました。



4月水源林



・クロモジの花が咲き出します。

「森の案内人」情報

- 実施時間：毎週土曜・日曜・祝日午後1時より1～2時間程度（冬季休止）
- 集合：水源林入口ゲート前
- 内容：森林インストラクターが自然観察にご案内します。森林のしくみ・手入れなどについて説明いたします。参加自由、参加費無料
*10人以上の団体は事前に下記までご連絡ください。
- 問合せ：(財) かながわトラストみどり財団 TEL:045-412-2255
fax:045-412-2300
- ホームページ：<http://www.ktm.or.jp>
- E-mail:midori@ktm.or.jp
- やどりき水源林までの道順
小田急線新松田駅または JR 御殿場線松田駅下車、富士急湘南バス「寄（やどりき）」行き乗車約25分。バス下車後（案内板あり）川沿いに徒歩35分。寄大橋の右横が水源林ゲートです。

イベント情報 & ご案内

春の息吹き感じて

3月20日に開園した箱根湿生花園（箱根町仙石原）で2万株の水芭蕉が湿地から顔をのぞかせ始め春の到来を告げている。今シーズンは暖冬の影響で例年より1週間ほど早いそうです。4月上旬頃まで楽しめそう・・・お早めどうぞ。



入園料は中学生以上700円
問い合わせ：☎0460-847-293まで

◇森のなかま原稿募集◇

送り先

<①手書き原稿送り先>

森 義徳
〒232-0053
横浜市南区井土ヶ谷下町16-3-202
Tel/090-5433-7784
Fax/<株リコー・森苑045-590-1910>
Mail : myforest@yha.att.ne.jp

<②メール原稿送り先>

【本誌】村井正孝
〒226-0002
横浜市緑区東本郷6-22-1-420
Tel/Fax : 045-476-4112
Mail : murapu60dai@yahoo.co.jp

【別冊】金森 巖

〒227-0038
横浜市青葉区奈袋2丁目10-5
Tel/Fax : 045-961-6695
Mail : i_kanamori@morinotabibito.com

【メールCCで】森本正信

〒194-0001
東京都町田市つくし野2-13-7
Tel/Fax : 042-796-6011
Mail : morimoto@bikkuri.co.jp
原稿の締切は毎月20日です。

◇ 編集後記 ◇

★大好きな溪流釣りのシーズンが始まっています。やどりきの支流では2時間で20匹、チビ山女だけでした。川魚は必ずリリースするようにしてください。（金森）

★地球の裏側は遠かった。ボリビアは産業もない900万人口、南米最貧国だが、一生懸命生きている生活感たっぷり。比べる日本は贅沢さが考えの多さが要望が、あり余る豊かさがある。他見要自戒必要有。（鈴木）

★春うららの陽に誘われて近くの畦道を歩いてきました。

ヒメオドリコソウ、オオイヌノフグリ、カントウタンポポ、タチツボスミレなど、春の野草の花盛りでした。（井出）

★おかげさまで、NPO法人成りをして1年が経ちました。早いものです。連絡事務所の設置や専従者の確保など、課題も抱えています。皆で一緒に解決していきましょう。（森本）

★桜が開花しようやく春の訪れを実感できるようになりました。また、水源林に出かけるのが楽しみな季節ですね。花粉症でお悩みの皆様には、お見舞い申し上げます。（森）

★4月号から校正を担当。アーセイコーセイに対応していきます。（小澤）

★新メンバーも加わり、より充実した「森のなかま」を目指していきます。応援をお願いします。（村井）

◇年間購読のお申し込み

「森のなかま」年間購読をご希望の方は、郵便局備付けの郵便振替を利用してお申し込みください。郵便振替口座 00230-0-2454 かながわ森林インストラクターの会宛まで購読料年2000円をお振込みください。振替用紙には、必ず、住所、氏名を明記してください。振替用紙到着の翌月号から12回/1年間お届け致します。（頒価 200円 送料共）

編集人：森本正信
広報部：井出恒夫、鈴木松弘、村井正孝、金森 巖、森 義徳、小澤章夫

ヤマケイ・カルチャークラブ ●様々な登山とカルチャーの楽しみ方をご紹介します。 ※詳細はアルパインツアーサービスのホームページをご覧ください。		
英語でハイキング ●講師：ツベート・ポトコガル氏	山の整体 ●粕 雅子氏(整体ナビゲーター)	エンジョイ鍋 ●山田 芳男氏(鍋の料理人)
高尾山(Mt. TAKAO)	新宿御苑	伊豆高尾山
出発日：4/14(火) ¥8,000 京王線・高尾山口駅 8:20 集合	出発日：4/23(木) ¥6,000 新宿御苑大木戸門前 10:00 集合	出発日：4/19(日) ¥13,000 新宿駅西口スバルビル前7:00 集

ALPINE ツアー サービス 株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル
Tel:03(3503)1911 info@alpine-tour.com
<http://www.alpine-tour.com>

身近な日本の山旅から世界各地の山岳リゾートや辺境の地までアルパインツアーは自然を愛する方々を地球のデコボコへご案内します。次の山旅は、アルパインツアーで出かけてみませんか。